

初期マルクスの階級把握と唯物論のプロブレマティーク

— 集団形成の論理をめぐって —

丹 辺 宣 彦

1. はじめに — 「即自階級」と「対自階級」のあいだ

現代の日本社会で生活を送る者にとって、「階級」の实在性や、階級的集団形成についてリアリティを感じることは稀であり、またきわめて困難なことになっている。かつて世間の大きな関心の対象であった労働運動やそれに付随する集合行動——ストライキやデモなど——は全体として大きく退潮し、政治的対立についても保守—革新ないし左派—右派という軸は意義を失いつつある。体験や実感としてそうであるだけでなく、たとえば投票行動に対する階級変数の説明力も長期的にみると下がりつつある [原・盛山,1999,24-27]。ことは日本だけの現象ではなく、マクロにみて先進諸国に共通した傾向となっている。

このような状況のなかで、かねてから階級理論に対する疑義が提示されてきたが、90年代に入ると、階級の消滅や「死」が公然と主張されるようになってきた [Lipset,1991; Pakulski & Waters, 1996]。こうしたなかで、とくに「強い階級論」の枠組を採っていたMarx派の階級理論は激しい批判にさらされ、支持を失い、その主張を大幅にトーンダウンさせることを余儀なくされている。こうしたことが生じたのは、社会状況の変化もさることながら、Marx派の階級理論の「強い枠組」が、現実を柔軟に解釈するポテンシャルを欠いていたからでもある。周知のように、『共産党宣言』に代表されるK.Marxの議論には、生産手段の所有／非所有をめぐり客観的な利害関係を同じくする主体（即自階級）が、数を増すにつれ結集し、しだいに階級意識をもち自己の利益を実現するため団結する主体に変化を遂げ（対自階級）、しかもこのプロセスは否応なく不可逆的に進行してゆく、と考えられる傾向があった。もちろん、資本主義的な関係が発達して労働者が工場に集められ、その労働条件や生活状況が低下しつつ均質化し、交通手段の発達による相互接触が増大する、といったいくつかの社会的条件が付けられてはいた。しかし、それがクリアされれば、半ば自然法則のように、対自的な階級主体が形成され歴史の推進力になるとする、暗黙の図式が存在していたのである。しかしそれらの条件は単純に過ぎるもので、R. Bendixが批判を向けたように、「いかなる状況のもとで諸階級が集団と成るのかという問題が残されたまま」 [Bendix,1974,151-152]だったのである。

共通の利害があり、結束によって利益がもたらされるから結束するのだ、というこの単純で—

見疑う余地のない図式は、その後の階級論と労働運動を長期にわたり呪縛し続けた。その呪縛力はきわめて強く、M.Olsonの集合行為論[1965]による根底的な批判によっても解けず、社会状況の変化がこれ以上否定しがたいものになるまで持続した。このように、「即自階級」から「対自階級」へ、という上の分りやすい図式は、実際には理論の分析・説明能力を大きく減殺するものだった。現実の主体が、社会のなかで「階級意識」をもち利益実現のために集動的に行動することは、例外的なケースにすぎない[Tilly,1981,17]。多くの主体は、せいぜいのところ、階級的・階層的な文化やハビトゥスのなかで半ば無意識に思考し行動するにすぎない。このような中間領域に位置する主体の日常的行為をとらえるのには、財(生産手段)の所有状態による客観的階級分類も、自覚的に行動する「階級主体」図式のいずれも不適切なのである。

しかしながら、不幸にも従来その意義が注目されていなかったが、マルクスのいくつかのテキストには、上記のような単純な2項的展開図式を超える、その中間点に照準した内容が含まれている。本稿では、社会学の立場から、初期Marxの2テキスト——『経済学・哲学草稿』と『ドイツ・イデオロギー』——にみられる問題構成に立ち帰って、階級関係、社会関係を構成する上での「物質的条件」の位置価を検討し、それが論理的に階級形成の論理にどのように関連させられていたのかを試論的に検討したい。本格的な検討は改めておこないたいが、このような作業を通して、Marx自身とMarx派の正統的な階級理論に内在していたバイアスを見定めるよすがとしたい。

2. 『経済学・哲学草稿』の問題構成と階級把握

すでに、1844年の『独仏年誌』に掲載された2論文で、社会を形成する主体が絶対的理性や神ではなく、現実の人間であること——人間が社会をつくり、また社会が人間をつくるということ——が確認されていた。にもかかわらず、現存の市民社会的秩序のなかで、人間は自己疎外の状態に陥っている。ここから、現実の社会関係たる経済的社会関係にまでさかのぼって、国家制度や疎外された宗教的意識のありかたを批判するという理論的方向が明示され、さらに人間開放の主体として、失うべきものをもたず、社会全体の解放が自らの解放の前提としてむすびついている「プロレタリア」という階級が、その担い手として見いだされた[Marx,1957(1844),390=1974,94-95.]。解放とは、「人間の世界を、諸関係を、人間そのものへ復帰させること」だとされたのである[Marx,1957(1844),370=1974,53]。しかし、ここでは重要な問いが答えられずに残っている。宗教や国家制度が疎外された意識や抑圧を生むにせよ、それらもそもそも人間自身がつくりだしたものであることに変わりはない。人間がそもそも自分自身のものであるような諸関係をなぜ喪失して自己疎外の状態に落ち込んでしまうのか、ということは結局謎のままにとどまっている。ここで仮に物質的な諸条件が意識を決定づけるという「転倒」のロジックを導入してみても、この問題は先送りされるだけで、直接答えることはできない。

そこで、『独仏年誌』の後に執筆された『経済学・哲学草稿』での自然観と「疎外」の分析について検討してみよう。後者での分析は、ある意味で前者の問題意識に対する回答ともなっている。第一草稿は、まず、労賃、資本の利潤、地代の源泉について検討している。細谷昂も指摘するように、「階級」の対立関係が、草稿の「基本的関心」であり、とりわけ、他人の労働から資本の私的所有がいかんして発生してくるのかに、問題の焦点があったといえよう〔細谷,1979,32-33〕。この検討は商品論的分析を欠いているけれども、続く「疎外された労働」の部分には、「疎外」の契機を分析した部分に続けて、きわめて興味深い社会関係の分析——労働者と資本家の——が展開されている。

Marxは、同時代の経済状態のもとで、労働者の労働と生活が——自らの生産物の有用性を、自らの能力の発達のために用いることができないという意味で——この「疎外」の状態におかれていることを指摘し、また当時の経済学がこの点に目を向けていないことを批判した。

「労働が生産する対象が、つまり労働の生産物が、ひとつの疎遠な存在として、生産者から独立した力として、労働に対立する……。労働の生産物は、対象のなかに固定された、事物化された労働であり、労働の対象化である。国民経済的状态のなかでは、労働のこの実現が、労働者の現実性剥奪として現れ、対象化が対象の喪失および対象への隷属として、獲得が疎外(Entfremdung)として、外化(Entäußerung)として現れる。」

[Marx,1985(1844),511-512=1964,87]

同時代の状況のなかで、労働者は富を生産すればするほど反対に貧しくなり、餓死するほど現実性を喪失した状態のもとにおかれていた。ここから、労働が異質なものとして労働者に対立し、疎外されるのはなぜか、という問いがクローズアップされる。労働者は、自然なしに、感性的外界(sinnliche Außenwelt)なしには、なにも生産することはできない。人間は、非有機的自然を食糧や、生活の材料、道具として利用することによって、肉体的にも精神的にも生きてゆくことができる。第3草稿の内容を予告するかのような部分と相前後して、Marxは、周知の、疎外の4つの契機——1.人間から自然を疎外すること、2.人間から彼自身を、彼の能動的なはたらき、生活活動を疎外すること、3.人間の類的本質が疎外されること、4.人間の人間からの疎外——を列挙している。4番目の「人間の人間からの疎外」ないし「人間に他の人間が対立していること」には、敵対的な社会関係があらわれている。そしてそこでは、それぞれの契機の規定関係も問題とされ、錯綜した議論が展開されている。4は1から3までの契機の「直接の帰結」だとされ、そのすぐ後では、「人間の疎外されたありかた、総じて、人間が自分自身に対して立つすべての関係は、人間が他の人間に対して立つ関係のなかに現実化され表現される」と述べている〔Marx,1985(1844),518=1964,98〕。「帰結」や「現実化」の意味は、やや曖昧であり、4の「人間の人間からの疎外」が、1から3の契機の「結果」であるというようにも理解できる。

しかし、このすぐあとの段で、べつの論理展開が示される。「われわれは、この〔疎外された、外在化された労働という〕概念を分析してきた、それゆえ単に一つの国民経済的事実事実を分析しただけである」と、前段の「疎外」の分析の意義を留保し、括弧に入れるかのような断り書きがあらわれる。続けて、「この〔疎外され、外在化された労働という〕概念が現実は何を表現し、表しているのかをさらに進んでみてみよう」という指示があらわれる。そしてこの指示に続いてあらわれるのが、労働の生産物が、他者に属するものになってしまう、という、生産物の収取を介した社会関係である。

「労働の生産物が労働者に属さず、疎遠な力として彼に対立しているならば、このことはただ、この生産物が労働者以外の他の人間に属することによってのみ可能である。労働者の活動が彼にとって苦しみであるならば、その活動は他の人間にとって享受であり、他の人間の生活のよろこびでなければならない。……人間の自分自身に対する関係は、他の人間に対する関係を通じてはじめて対象化され現実化される、という先に立てた命題についてよく考えてもらいたい。人間が、自分の労働の生産物、彼の対象化された労働と、よそよそしく敵対的で強力な、彼から独立した対象として関係をもつなら、彼は、他の、彼によそよそしく敵対的で、強力な、独立した人間がその対象の主人であるように、その対象に関わっているのである。〔強調は引用者による〕」

[Marx,1985(1844),519=1964,100]

この箇所をみると、たんなる人間相互の対立(=第4規定)ではなく、ある者の労働の生産物が、他者によって占有されることが、疎外の4規定の現実的基底であることが明らかになってくる。「国民経済的事実」から分析され取り出された疎外の4つの契機はそれだけで完結しているわけではない。生産物の収取と占有を介した社会関係こそが、1から4までの疎外の契機が「現実化」するとともに、それらを規制するもっとも重要な関係として位置づけられていることは疑いえない。ちなみに、『経済学・哲学草稿』をめぐっては、「疎外論」を中心としてさまざまな議論がなされてきたが[Marcuse,1932=1968; Schmidt,1962=1972; Lapin,1969; Roberts&Stephenson,1970; Cataphores,1972; Schaff,1977; 清水,1971; 廣松,1974; 細谷,1979,etc.]、上の疎外の4契機と、後続する「現実の社会関係」については、明確に区別しつつ関係づけられていないように思われる。この結果、「疎外」の解釈をめぐって、自然と社会の関連は——接続されているように見える場合でも——切断されてとらえられ、上に示した社会関係の連関に即した議論はなされなかった。A.Schaffのように、疎外の客観性と社会性を強調する論者もつぎのように言う。

「疎外と自己疎外の区別……われわれは、人間の生産物が、その創り手から疎外されるときに、疎外とかかわる。これに対して、人間が社会から、したがって他の人間から、あるいはまた自己自身から疎外されるとき、自己疎外とかかわる。第一の場合——疎外における——では、わ

われわれは、人間労働の生産物が、したがって一定の対象（この言葉の広義での、したがってたんに物だけにかぎられない）が疎外され、人間がそれについて考えたり、感じたりすることとは無関係に生きはじめるという意味で、ある客観的な関係にかかわる。第二の場合——自己疎外における——では、われわれは、人間が社会的な、かれによってつくられた世界から、あるいは固有の自我から疎外されるという意味で、ある主観的な関係とかかわっている。」

[Schaff,1977=1984,102-103]

詳しく解説する必要はないだろう。対象化の関連、労働の対象との関係は、人間の社会関係における「自己疎外」と相対的に切り離され、後者はさらに「主観的」な関係としてとらえられてしまうのである。細谷の議論は、先行研究の周到な整理に基づいているが、4規定は国民経済的事実に「内包され」、それが第1規定から順に下向的に展開されたものだというのである〔細谷,1979,45-49,57〕「生産物の収取関係」の独自の意義は、ほとんど問題とされていない。

ここで提示された「疎外」をめぐる解釈が、はたしてなにを意味しているのか、これを敷衍してみなくてはならない。よく知られている通り、Marxは、人間が、自分の本性を、感性的な物質の対象と全面的にかかわることによって、獲得させ、発達させるものと考えていた。テキストが執筆された順番から言えば後の箇所になるが、第3草稿の「私的所有と労働」部分ではつぎのように言われている。

「私にとってある対象の意味は、私の感覚の達するちょうどその範囲までしか及ばない……それだから人間の諸感覚は、非社会的人間のそれとは別の感覚なのである。同様に、人間の本質の対象的に展開された富を通じてはじめて、主体的な人間的感性の富が、音楽的な耳が、形態の美に対する目が、要するに、人間的な享受をする能力のある諸感覚が、すなわち人間的な本質諸力として確証される諸感覚が、はじめて完成されたり、はじめて生み出されたりするのである。なぜなら、たんに五感だけでなく、いわゆる精神的諸感覚（意思・愛など）、一言でいえば、人間的感覚、諸感覚の人間性は、感覚の対象の現存によって、人間化された自然によって、はじめて生成するからである。」

[Marx,1985(1844),516=1964,139-140]

人間は自然と「不断の」交流をもたなくてはならず、こうした意味で、——第1草稿でもすでに指摘されている通り——自然は、いわば人間の「非有機的身体（das unorganische Leib des Menschen）」なのである。そして人間は、労働を通じて自らを外化し、このような自然に手を加え、より有用な対象へと変換してゆくことができる。このこと自体は、通常のマルクス理解の範囲内でも了解可能である。しかし、上の引用部分で、社会のなかで生きる人間の諸感覚が、「非社会的人間のそれとは異なる感覚なのである」とされている箇所は、論理展開上——人間の感性が、自然と交流することによって発達するということから直接導きだせるわけではないとい

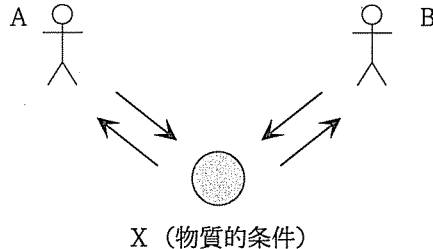
う意味で——自明のこととは言えない。このことに答えている論理展開を、さきの「疎外された労働」のなかに、みてゆくことができる。まず、自然との交流による感性・能力の発達という命題は、論理上次のことを含意している。つまり、人間が、彼の心身の能力や本性の発達に寄与するそうした対象的存在を、利用できない条件のもとに置かれるときには、本質的諸力の発達を奪われることになってしまう。このときに、人間は、先の規定が示している4つの意味において「疎外 (Entfremdung)」されてしまうということが生じるわけである。

しかしながら、こうした「疎外状態」が生じることは、物質的对象の意識に対する作用という単純かつ限定的な因果関係では決して説明することはできない。労働と消費のサイクルのなかで、ある生産物の利用可能性が、ある主体にたいして制限されてしまうという自体は、物質固有の属性から導き出すことはできない——たとえば言えば、小麦やブドウ酒には、それを誰が飲食すべきかを指定する内在的属性はなんら存在しない——からである。Marxはここで、規定要因を提示するさいに、主体—客体図式に依るのではなく、物質的对象をめぐって自我と対峙する主体＝他者という社会関係を導入してくる。すなわち、ある有用な物が、それを生産する本人にとって利用を禁じられ (あるいは限定され)、疎外された「物」になるのは、その対象が他者によって私的に所有され、アクセスを禁止されるからにはかならない。当然のことながら、この「他者」の位置に置かれたのが、「資本家」ないし「ブルジョワ」という階級的主体である。ここで先に示した、「労働の生産物が労働者に属さず、疎遠な力として彼に対立しているならば、このことはただ、この生産物が労働者以外の他の人間に属することによってのみ可能である。……」という、「疎外された労働」中の箇所を再度参照すると、論理的関連が非常に明瞭になると同時に、この箇所の重要性が改めて明らかになる。Marx自身が強調しているように、「労働者以外の他の人間」、すなわち資本家・ブルジョワが、労働者の生産物をわがものとし、享受すること「によってのみ」、はじめて「疎遠な力として彼に対立」することが生じるのである。そして、このことから、私的財産の廃止をともなう共産主義社会の実現が、人間の解放と結びつけて構想された論理を、——いわばその陰面として——理解することができる。私有財産制度とともに、生産物の剥奪が廃止されれば、労働者はそれらを享受することができ、みずからの能力と欲求を自由に発達させることができるようになり、歪んだ社会関係が廃棄されると考えられたのである。

こうして、疎外は、1)人間が物的対象にかかわり、利用すること、それを制限されること、を基調としつつ4つの位相でとらえられているが、そのようなことが生じる根拠として、2)物的対象、とりわけ労働の生産物が、他の主体に属し、享受されることに求められていた。論理構成は二重になっており、社会関係が導入されて、はじめて根拠と位相をとらえた疎外の分析が成り立つことが分かる。

テキストを離れて、このことをさらに敷衍してみよう。上記の議論から、『経済学・哲学草稿』期の初期Marxにおいて、資本主義的諸関係の焦点や共産主義社会の理想といった核心的な諸問題は、物質的条件や自然の、意識や精神にたいする優位という、ポピュラーではあるが限定的な

問題構成のみに準拠して分析されているとは言えないことが理解されよう。疎外を発生させる規定要因として、物質的諸条件は、社会関係を構成する不可欠の項として、より複雑な観点からとらえられているのである。



上の図に、以上のロジックを視覚化してある。物質的対象Xの有用な属性は、単一の主体や集団にとっての享受や利用、意識にとっての作用といった面からのみとらえられるのではない。第一に、この関係はその物をいわばこの支点として複数の主体に対して設定される。その背後には、有用なXを占有して享受しようとする別の主体Bが存在していて、実際にそうするために、Aは、自身がそれを生産したにもかかわらず、Xの使用価値aを——質的・量的な変化をこうむり——そのまま享受することができなくなってしまうのである。

したがって、第二に、社会関係を媒介する物質の側に焦点を当てると、物質的対象Xは、複数の主体のあいだで、彼ら各々にたいして、ある属性ないし有用性¹⁾を両立させうる／させえない性質をもった媒介物としてとらえられていると言えよう。BがXを消費して、bという属性を享受しようとするれば、Aの側では、aの享受をあきらめなくてはならないか、質的あるいは量的に不十分にしかそれを用いることができないということが生じる。具体的には、1リットルの水で2人の人間が喉の渇きをいやすことは可能だが、その水が一人の所有物であって、将来のために、あるいは他の目的のために、それをもう一人の人物に与えないときには、彼の渇きはいやされないことになる。状況にもよるが、この社会的文脈では、水は、たんなる物理的な水ではなく、共に享受する友情の証であったり、使用を禁じられた渴望の対象であったり、あるいはまた値段のついた商品になったりするかもしれない。懇願や拒否、策略や隠匿、虚言や中傷など、その水をめぐってさまざまな社会関係が発生し組織される可能性がある。こうした関係には無限のバリエーションが生じるが、このことは、その水をたんなる物理的な水やその性質ととらえていては視野に収めることができない。

もちろん、ある種の財は、「集会的」な消費が可能である。広い公園や道路は、比較的多くの人間が、他人に妨げられることなく利用することができる。あるいは、映画のスクリーンや電話の交換施設、放送施設の送信アンテナの場合のように、技術的な開発が物質的な媒介の質を変更することによって、そうした利用の可能性を広げ、創出する場合もある。このような主体的変更の可能性については、別途論じなくてはならない。しかし、このようなことを考慮に入れた上で、

なお次のように言うことができよう。すなわち、社会関係を媒介する物質的条件の拘束にはある種の客観性・拘束性が存在していて、それが、その時々²⁾の階級・階層間の対立を「止揚」不可能なことがらにしてしまう、ということである。「余裕」の範囲内で財が集合的に使用されているために²⁾、この拘束性が目につかない場合もあるかもしれないが、それはこの拘束性が存在しないことを意味するのではない。

たしかに、こうした社会的な問題連関は、それ自体、意識と物質、精神と自然との単純な関係を前提とし「含んで」成立してはいる。しかし、それが社会関係という一段「高次」の関係へと置き直されることによって、そのことの意義は変化してしまう。ある製品や、ある土地が、ある主体にとって享受することを制限され、自分の社会的行為がその周りをめぐって組織される、不可思議な魅力を備えたものになるとしても、それはその対象「固有」の性質のためではない。それはまさしく、その社会関係を、その物質的対象が媒介していることによるのである³⁾。

社会的な問題構成は、なぜ通俗的なバージョンに読み替えられてしまうのか？推測の域を出ないが、理論的営為に作用している社会的力を再帰的に分析すると、これは、ここでもある種の物神崇拜が生じているためと考えることができる。とくに、「疎外された」社会関係のなかで生活するときには、個人にとって、物象の動きは、認識できない他者の意向に従いこれを凝縮するため、理解することができず、神秘的な力をもつものとして知覚される。このとき、社会関係の追究は阻害されてしまい、第一の原因は、媒介項である物的条件自体であるかのように観念されてしまうことになる。商品や貨幣、資本についての物神崇拜作用は、こうした関係の典型例であろう。こうした意味で、皮肉なことに、主-客図式に立った唯物論的説明は——これは主体間のコミュニケーションを物的諸条件から切り離す発想と親和的である——それ自体が社会関係の拘束力から免れていないのである。

3. 協働／生産力／物象性 ——『ドイツ・イデオロギー』と階級形成

史的唯物論を彫琢する未完の協働作業であった『ドイツ・イデオロギー』のさまざまな章句には、「社会的」論理構成と「限定的な」論理構成が相並んで存在しており、そのなかで、成熟期の理論にみられる理論的道具立てが萌芽的に姿を現してくる⁴⁾。歴史的行為の規定、階級闘争史観に対応する社会の発達段階の設定や、生産領域の因果的優位性、生産手段の所有形態との対応関係、などの論点である。これらの点をいちいち詳しく検討することはできないが、ここでは、『経済学・哲学草稿』での上の視点に加え、新たな理論的視点——階級論にとって大きな意味をもつ——が導入されてくる。

この新しく付加された関係とは何であろうか？第1の点は、一見したところそうは思われなかもしれないかもしれないが、分業する諸主体の協働が、生産力を高め、またそうした生産力が逆に社会関係を制約するという考え方である。「フォイエルバッハ論」の「A イデオロギー一般、ことにド

イツの「歴史」と題する部分では、あらゆる人間の歴史の前提として、「歴史的行為」(geschichtliche Tat)の4つの規定が挙げられている。第一は、欲望を満たす手段の生産という意味での物質的生活の生産であり、第二は、欲望を満足させる手段、満足させる行動が新しい欲望を産み出すという事態である。第三は、人間が他の人間を再生産し、家族をはじめとする社会関係をつくることである。この三つの規定は、人間の誕生以来同時に存在してきた3つの「契機」だとされる[Marx,1958,29=1956,34-36]。ところで、重要な指摘は、むしろこの規定を受けてこの後につづく第4の規定の方である。

「ところで生活の生産は、労働における自己の生活の生産も生殖における他人の生活の生産も、そのまますぐに二重の関係として——方では自然的な、他方では社会的な関係として——あらわれる。ここに社会的というのは、どんな条件のもとにしても、どんな様式によっても、またどんな目的のためにしても、複数の個人の協働(Zusammenwirken)という意味である。ここから、つぎのことが明らかになる。ある生産様式ないし産業的段階が、一定の協働ないし社会的段階のありかたと結びついていること、この協働の様式はそれ自体ひとつの『生産力』であるということ、そして人間たちの達成可能な生産諸力の大きさが、社会的状態を規定するので、それゆえ『人間の歴史』は、つねに産業と交換の歴史との関係において研究され論究されなくてはならないということである……人間相互のあいだにはひとつの唯物論的つながりがあり、これは欲望と生産の様式とによって制約され、そして人間そのものとおなじようにふるいのである。——このつながりは、人間をことさらにつなぎあわせるようななにか政治的あるいは宗教的な愚論が存在しなくても、いつも新しい諸形態をとり、したがってまた『歴史』を提供する。」 [Marx,1958,30=1956,36]

第4の規定は先行する三契機を包摂して設定され、自然的関係と社会関係をふくんでいる。後者は、たんなる人格間の関係ではなく、「協働(Zusammenwirken)」としてとらえられ、協働様式じたいが生産力であると同時に社会関係でもあるとされている。そしてこれを受けて、人間相互の「あいだに」唯物論的つながり(ein materialistischer Zusammenhang)が存在するとされている。したがって、この規定は、『経済学・哲学草稿』で確認した、物的諸条件による社会関係の媒介という図式を継承し、そこに新しい関係を付加することによって発展させているものと考えられる。おなじ節の末尾では、市民社会が生産諸力によって制約されつつ制約する「交通形態(Verkehrsform)」であるという言及がみられる。さらに「B イデオロギーの現実的土台」の「(1)交通と生産力」という部分では、この問題は節のタイトルとされていて、繰り返り取り上げられる。これは、じつは唯物論の社会的図式のうえで、新しい内容を展開していると考えられる。『経済学・哲学草稿』の社会関係分析は、ブルジョワとプロレタリアートのゼロサム的な利害関係の相克を焦点とし、分業のメリットをたたえる「国民経済学」の立場は批判さ

れていた。これに対して、ここでは、異質な主体どうしの分業ないし交換による協働が生産力を上昇させること、つまりある場合にはプラスサムの結果を生じること、そしてその生産力の上昇が、新たな社会関係を制約しつつ成立させることが積極的に認められている⁵⁾。これは、資本一賃労働関係じたいに適用されているのではないが、社会関係における利害関係とアウトプットの関係をとらえる視点が拡大したことを意味する。

『ドイツ・イデオロギー』の第2の新しい視点は、協働における生産力と社会関係との相互関係という問題を、「意識」(とその「物象化」)の問題と関連させるアプローチがはっきりとみられることである。まず、先の歴史的行為の「4つの規定」に続けて「意識」について述べられている部分をみておきたい。Marxによれば、意識は純粋な意識として存在するのではない。

『精神』は『物質(Materie)』につきまといわれているという呪いをもともとおわされており、この場合に物質は運動する空気層すなわち音響の、つまり言語のかたち(Form)であられる。言語は意識とおなじようにふるい——言語は実践的な意識、他の人間にとっても存在し、したがってまた私自身にとってもはじめて存在する現実的な意識である。そして言語は意識とおなじように他の人間との交通の欲望、その必要からはじめて発生する。一つの関係が存在する場合には、それは私にとって存在する。動物はなにものにも『関係する』(sich verhalten)することなく、また一般に関係しない。したがって意識ははじめからすでにひとつの社会的な産物であり、そして人間が一般に人間が存在するかぎりそうであるほかはない。」

[1958,30=1956,37]

「精神」は「物質」につきまといわれている、という言明に続けて、後者が言語の「かたち」であられるという、理解しがたい表現があらわれる。しかし続く部分をみると、他者にとっても自己にとっても実践的に存在するという「社会的」連関におかれているということが、その意味であることが分る。言語が他者との「交通」の欲望や必要から発生するといわれるのもこのためである。このような把握は、社会関係を媒介するものとしての物質という図式と対応していると言えよう。そして、関係が存在する場合、それは自己にとっての現実的な「存在」なのだとされた後に、動物が他者との関係でsich verhaltenしないという表現が用いられている。ここでの「関係をもつ」には、このような社会関係を引きうけつつ働きかけていく行為という意味がこめられていると理解することができよう。

しかし人間は、ここで指摘された言語的コミュニケーションによって問題なく他者や社会を理解できるわけではない。この部分から後の記述は、社会関係の制約性と、そのなかであられる限定的な、「物象化」された理解の問題について論じてゆく。

「意識はそもそも社会的な産物であり、人間が存在するかぎりそうである。意識はもちろん当

初は直接の感覚的環境に関するたんなる意識であり、自覚的になりつつある個人の外部にある他者と事物についての限られた連関の意識にすぎない。それは同時に、最初はまったくよそよそしく、全能で不可侵の力として人間に対立してあらわれる、自然についての意識である。自然にたいして人間は獣のように関係し、禽獣のように圧倒されるので、自然に関するまったく動物的な意識なのである(自然宗教)。

ここから同時に分るであろう。この自然宗教や自然にたいするふるまい方は、社会形態によって規定されており、またその逆でもある。どこでもそうであるように、ここでも自然と人間との同一性が前面にあらわれる。すなわち、自然に対する限られた関係が、相互の限られた関係を条件づけ、相互の限られた関係が自然に対する限られた関係を条件づけている。まさに自然が歴史的にほとんど変形されておらず、他方まわりの人間と結合しようとする必然性、かれがともかくある社会で生活しているという意識の端緒があらわれつつあるということである。」

[Marx,1983,31=1956,38]

認識能力が限られた初発の意識は、「身近な感性的環境」しか認知することができず、他者や事物との「限られた連関」しか意識することができない。それゆえに、自然は人間を圧倒し、「全能で不可侵の」力としてあらわれ、自然宗教を発生させる。ここでは、自然は「物象的」な力としてあらわれるし、社会関係についてははなおさらそうであろう。そしてMarxによれば、意識の認識能力が限られているのは、たんに自然の能力としてそうなのではない。自然への限られた関係は、社会形態(Gesellschaftsform)によって制約されているし、ぎゃくに限定された社会関係も自然との関係によって制約されているというのである。この相互規定関係が生じる理由はここでは語られていない。しかし、直後に、意識が分業の発達にともなう生産性の上昇、欲望の増大によって発展をとげてゆく、とされているところからみて、分業がこの相互関係を媒介するものと考えられていることが分る。そして性的行為、自然成長的な分業に続いて、有名な物質的労働と精神的労働の分業関係があらわれるのである。この箇所には「生産力(die Produktionskraft)」と「社会的状態(der gesellschaftliche Zustand)」に「意識(das Bewußtsein)」を加えた3項が「三つの契機」を成して、「たがいに矛盾に陥る」ことがはっきりと指摘されている [1958,32=1956,40]。

社会学の視点からみてなによりも重要なことは、『ドイツ・イデオロギー』の分析では、第1の、分業という社会関係とそれが生み出す力の相互規定関係、そして意識形態とそれらとの関係という第2の論点は、狭義の経済的關係にはかぎられず、集団形成——家族、種族や市民社会、国家、のそれ——のダイナミクスじたいについても適用され、相互に結び付けられているという第3の点である。廣松渉も、物象化論の立場から国家をとらえつつ、「前項で、われわれが存在論的な意義にまで遡りつつ『対象的活動』と『協働的連関』の二契機として顕揚した『生産』は、視角を変えて把え返せば、人間生活の、したがってまた『社会』の基底的な存立条件である」

[廣松,1989,155]と、これに近い立場から指摘をおこなっている。そしてMarxの言うところを注意深くたどると、そうした社会集団には二つの種別があることがみえてくる。

まず国家についての記述をみてみよう。個人の特殊利害にたいして、分業する諸個人の相互依存関係から生じる「共同利害 (das gemeinschaftliche Interesse)」が区別されている[Marx, 1958,32=1956,43]。この共同利害は、本来は人間たちの協働が生み出した「結合された力」であるが、諸個人にとってはよそよそしく (fremd) 独立した力としてあらわれ、かれらをむしろ支配する力、具体的には「幻想的な共同性」である「国家」としてあらわれるのだとされる。このようなことが生じるのは、協働の力が、自由意志によってコントロールされず、自然発生的にあらわれるからである。この理論的モチーフは、社会関係と生産力の相互関係という第一の論点を前提として、そうした関係が「共同利害」として個人の生活から疎外され、国家という集団の形成として、そして「幻想的共同性」として自立してゆく事態をとりあつかっている。こうして、物的社会関係を取り結ぶ当事者は、たんに利害を異にするという点で共通性を持ち、また互いに対立する関係としてとらえられるのではなくなる。社会関係や集団関係をとりむすぶなかで、生産力や「結合された力」を発揮すると同時に、それら——疎外され自立化したそれらの力をふくめて——に関係を規制され拘束される存在として、とらえられるようになっている⁹⁾。

このような理論的視点は「階級」についてもはっきりと適用され、そのとらえかたも、以前に比べて異なった要素を付加してゆく。ただし、「階級」は、「特殊利害」の共通性が自立化してゆく、第二の集団のタイプに属している。この点は、後段の議論との関連できわめて重要である。「B 交通と生産力」の、中世都市について述べている部分では市民階級の形成について次のように言われる。

「個々の市民の生活条件は、既存の諸関係にたいする対立と、そのことによって決まる労働の様式によって、かれら全員にとって共通であり各個人からは独立した条件となった。……個々の都市が結びつくとともに、これらの共通の条件は階級条件 (Klassenbedingungen) へと発展した。……それぞれの諸個人は、他の階級に対して共同の闘争をおこなわなくてはならないかぎりにおいてのみ、ひとつの階級をかたちづくる。しかしその他の点では彼らは、競争して対立しあう。他面で、階級は諸個人に対して自立化し、かれらは自身の生活諸条件をあらかじめ定められたものとして見出し、階級から生活上の地位や人格的發展を示されるようになり、階級のもとに包摂されてゆく。これは、分業のもとへの各個人の包摂とおなじ現象であり、私有制とそうした労働の廃棄によってのみ取り除くことができる。階級のもとへのこうした個人の包摂が、同時にまたありとあらゆる表象への包摂にどのように発展していくかは、すでに何回も暗示しておいた[強調は引用者のもの]。」 [Marx,1958,34=1956,79]

国家とおなじように自立化していくとされているが、階級の場合には、「共通の階級条件」が基

盤を成している点で鋭い対照を示していることは明らかである。つぎの「共産主義——交通形態そのものの生産」の末尾、「フョイエルバッハ論」全体の最後の部分では、つぎのように整理されている。

「これまでの展開すべてから、つぎのように言える。ある階級の諸個人が入りこみ、第三者に対する共同利害によって条件づけられていた共同関係はつねに、諸個人はその階級の存在条件を生きるかぎり、これに平均的諸個人として所属しているひとつの共同体 (Gemeinschaft) であり、かれらが個人としてではなく階級成員として関与していたような関係であった。……歴史的発展の経過とともに、そしてまさしく分業のもとで不可避な社会関係の自立化をつうじて、各個人の生活のなかにひとつの区別——人格的であるかぎりの生活と、労働の一分肢に属しその諸条件へと包摂されているかぎりの生活という区別——が現れてくる。[強調は引用者のもの]」

[Marx, 1958, 75-76 = 1956, 115-117]

ここでは、たんに「共通の」生活条件と労働様式の種差が階級を形成するのではなく、つぎのような階級規定があらわれてくる。第1に、各個人が他の階級に対して団結し共闘するかぎりで階級がかたちづくられることで、これは集団形成と階級の形成をむすびつける論点である。そして、共同によって生じる力が各個人から自立化しぎやくに各個人を拘束するような関係が階級的諸条件(Klassenbedingungen)であると主張されている。第Ⅲ部「聖マックス」中でもおなじモチーフが姿をあらわし、そこではこの「自立化」は「物象化」であり「疎外(Entfremdung)」であると言われている⁷⁾。これは、社会関係と生産力の相互関係という問題連関が、国家だけでなく、階級という集団じたいにも援用されていることを示している。第3に、強調部分にみられるように、個人の生活をめぐる諸関係が、階級関係による部分とそれ以外の「人格的」な部分とに分けられていることである。つまり一見矛盾するようであるが、個人の生活は、階級関係に拘束されるようになると同時に、すべて階級関係に包摂されてしまうのではなく、その意味では自由な部分を残しているのである。これらに加えて第4に、階級へのこうした(部分的)包摂が、たんによそよそしい力にとどまるのではなく、同時にさまざまな「表象」——名譽や忠誠、自由や平等などの観念や、宗教的表象など——のもとへと個人を包摂してゆくという言わば象徴的な関係が設定されていることを挙げておきたい。

そして上の引用部からは外れるが、第5に、階級的主体の結合から生じる「物象的な」力は、共産主義の交通形態のもとで廃棄されるとされる。それは、ふたたび「団結」した個人によって、総体的な生産力を統制することによって達成される。資本主義的關係においては、個人は、分業によって生み出していた力——生産力に代表される——を、団結によって統制しておらず、それゆえに、その力が「物象的」な力として現われていたのである。

「いままで個人たちが結合してつくりあげた仮象の共同体は、いつもかれらにたいして独立し

たものになっていた。そして同時にまたそれは、他の階級にたいしての一つの階級の結合だったから、支配される階級にとってはまったく幻想的な共同体だったばかりでなく、またひとつの新しい桎梏でもあった。現実的な共同体においては、個人たちはかれらの連合のうちに、そしてまた連合によって、同時にかれらの自由をも獲得する。」 [Marx,1958,74=1956,114]

このように、『経済学・哲学草稿』の社会関係分析とともに、『ドイツ・イデオロギー』で新たに追加された規定を補って内容を考慮すると、「階級」というカテゴリーは『共産党宣言』で図式的に提示される歴史の主体としての階級——「即自階級」から「対自階級」への移行をふくめた——に比べて、はるかに陰影と含蓄に富んだ内実をもっていることが次第に明らかになってくる。ここで読み解いた限りでは、Marxの「階級」は、分業のなかで個人が取り結ぶ社会関係のもたらす「力」によって可能となり、また——それが社会的にコントロールされない場合は——自立し拘束する関係を個人の生活領域のなかに生み出す。そのことはまた象徴的、物象的な表象関係の設定をとともなっている。階級関係が拘束する生活領域は、分業と雇用無関係が拡大するのにもなっておそらくしだいに拡大してゆく。にもかかわらず、他方では、そうした関係の拘束がおよばない、その意味で自由で人格的な関係が個人の行動のなかに存在することも認められている。すなわち、Marxがここで見ている諸個人は、明確な階級意識をもち階級利害のために組織的に行動する100%の「階級的主体」なのではおそろくなかった。客観的關係だけでなく、幻想的で「物象的」な意識をもたざるをえないという意味では、主観的にみても、「中途半端な」、しかし他面リアリティを備えた階級的主体が設定されているとみなしうる。協働から生まれる統制されない力が物象的な意識を生み、それらがセットになって、完璧ならざる階級的集団と階級的主体をともにつくるわけである。そしてあえて言えば、それは、「即自階級」と「対自階級」というふたつの階級の様態の乖離をつなぎ、媒介してゆく内実をふくんでいると考えることができよう。もちろんここで確認した問題連関には一定の限界があり、分業のメリットが一資本の経営組織に応用されて、労働者が組織への関与から利益を得ているとするような視点はない。しかし、狭義の経済的關係のみならず、階級形成の問題へ、そして階級形成のみならず、集団形成、組織形成全般に適用することが可能なユニークな発想が胚胎していたことを認めることができる。

4. 結び

以上検討したように、初期の論考には、社会関係の分析と、集団・組織分析にとって革新的なみかたがふくまれていた。重要な論点は、人間の感性的活動全体のなかで、1. 社会関係を物質が非対称に媒介するというモチーフがみられること。そして2. この論点は、階級関係の発生に構成的な意義を有していたという点である。しかし、最初の論点にかかわる、唯物論の「社会的問題構成」と本稿で呼んだロジックは、『経済学・哲学草稿』でも『ドイツ・イデオロギー』で

も、それとして名称を与えられてはおらず、明示されてもいない。このために、また知覚の物象性のために、従来の解釈では、主客図式という限定的な枠組に引き寄せられて、唯物論的な「転倒」と、社会関係の側面は分析的に切り離されてしまい、両者はあとから関係づけられる論理構成になりがちであった。

第二の、階級形成と、集団・組織形成にかかわる問題連関も、第一の論点に接続するかたちで、きわめてユニークな論点として展開されているが、これもそれとして仕上げられ、完成されていない。しかし、『ドイツ・イデオロギー』には以下のような論点が認められた。1. 社会分業や「社会的交通形態 (soziale Verkehrsformen)」が、生産力や「結合された力」を生み出すことが認められる、2. しかしそのような「力」は逆に新たな社会関係、集団のありかたを規制するとともに、それ自体が社会的に統制されえない条件のもとでは、国家権力にみられるように物象的に「自立化」して、諸個人の生活領域(の一部)を拘束するものとなる。「階級」の自立化と拘束性もおなじモチーフから——ただし、「共通の」階級条件という対照的な基盤から——問題となる。その際、3. さまざまなイデオロギー的表象が、諸個人のおこなう意味付与に介入してくる。

本稿の議論により、史的唯物論の「社会的な」問題構成、「集団形成に関わる」問題構成とも言うべき論理構成をクローズ・アップしておいた。なぜこのロジックが潜在的なものにとどまり、成熟期の理論のなかで然るべきかたちで継承されることがなかったのか、これは別途検討されなくてはならない課題であろう。また、ここで確認された問題連関が現代の社会学にとって有する意義について検討する作業についても、機会を改めておこないたい。

注

- 1) ここでの議論は、物の有用性あるいは使用価値に焦点を当てているが、物質は、有害性や毒性のように、負の有用性を有し媒介することもあるだろう。またとくに有用性にかかわらない属性ももっていると考えられる。
- 2) 前段の例を用いるなら、広大な公園や運動場を、少数の人間で利用するケースがこれに該当しよう。
- 3) 『ドイツ・イデオロギー』のなかで、Marxは、「私有」と「所有」とを区別しながら、機械と利潤、土地と地代との関係についてつぎのように述べている。

「……私有は人間の個性ばかりでなく、事物の本性をも疎外する。土地は地代とはなんの関係もないし、機械は利潤とはなんの関係もない。しかし地主にとっては、土地はただ地代の意義しかもたず、彼はその地面を賃貸して地代をとりたてる。これこそ、土地が自分にそなわっている諸特性のうちのかなにか——たとえばその沃度の一部を失わなくても失いうるところの特性である。すなわちこれこそ、その程度、いやその存在さえも社会的諸関係にかかってくるこ

ろの特性なのであって、これらの関係は個々の地主が別段なにもしなくても形成され廃棄されるのである。機械もおなじである。……ひとくちで言えば、地代や利潤などのような私有の現実的な存在様式は一定の生産段階に対応する社会的諸関係である。」

[Marx,1958,212=1956,173-174]

地主にとって、土地は地代を生むものとしての意義しかもないのだとすれば、土地をめぐる地主の社会的行為——小作人への圧力や監視や、共同体への政治的働きかけなど——も、その焦点をめぐって組織されてゆくはずである。ここで決定的なのは、土地のたんなる物理的性質なのではなく、それが社会関係を媒介するときに当事者たちにおよぼす拘束性なのである。

- 4) 唯物論のみかたへの「転倒」について触れた箇所の人称の変化をみると、ここで言う「社会的な」問題構成への移行と重なり合うかたちになっている。

「意識が生活を規定するのではなく、生活が意識を規定する。第一のみかたでは、生きた個人(Individuum)としての意識から出発するが、第二の、現実的生活に対応したみかたでは現実的な生きた諸個人(Individuen)そのものから出発し、そして意識をただかれらの意識としてのみ考察する。(強調はMarx自身によるもの)」

[Marx,1958,27=1956,33]

ここで、「唯物論的なみかた」では、「生活」と「意識」の規定関係が逆転しているばかりでなく、主体の人称が複数形へと変化していることが確認できる。物的関係の規定性への視座の転換は、社会関係への着目と同時的なものになっている。

- 5) 「積極的に認められている」ことは、この相互関係が、共産主義社会の分析にまで適用されていることから理解できよう。

- 6) 廣松渉の整理では、『ドイツ・イデオロギー』の国家論にはこの他に、「市民社会の総括としての国家」、「支配階級に属する諸個人の共同体としての国家」、「支配階級の支配機関としての国家」という規定があるとされているが[廣松,1989,34]、これらの点についてはここでは問わない。

- 7) 「人格的諸利害が、諸人格に対抗してたえず階級利害へと、すなわち個々の人格に対して自立する共同利害へと自立化し、そこで一般的利害の形態を装うのはいかにしてか、そうしたものとして現実の諸個人に対立し、この対立——人格的諸利害が一般的利害として規定されるような——のなかで、意識によって、観念的な、いや宗教的、神聖な利害としてさえ表象されることが可能になるのはいかにしてか? こうして、人格的諸利害が階級利害へと自立化するなかで、個人の人格的な行動が物象化し(versachlichen)、疎外されなくてはならないのはいかにしてか、同時に、自身に依存しない、交通によってもたらされた力として彼なしに存立し、社会的諸関係へと変化してゆくのはなぜか? すなわち、彼を規定し、従属させ、そして表象のなかで『神聖な』諸力としてあらわれるような、一連の力へと変わってゆくのはいかにしてか?」

[Marx,1958,227=1956,178]

文 献

- 秋葉節夫,1998,『マルクス階級論の構造』,創風社.
- Bendix,1974,Inequality and Social Structure:A Comparison of Marx and Weber,*American Sociological Review*,vol.39(2).
- Catephores,G.,1972,Marxian Alienation—A Clarification,*Oxford Economic Papers*,vol24(1).
- 原純輔・盛山和夫,1999,『社会階層 豊かさのなかの不平等』,東京大学出版会.
- 廣松渉,1974,『マルクス主義の成立過程』,至誠堂.
- ,1989,『唯物史観と国家論』,講談社学術文庫.
- 細谷昂,1979,『マルクス社会理論の研究』,東京大学出版会.
- Lapin,Nikolai,1969,Vergleichende Analyse der drei Quellen des Einkommens in den "Ökonomisch-philosophischen Manuskripten" von Marx, 細身英訳「マルクス『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」『思想』561号,1971.
- Marcuse,1932,Neue Quellen zur Grundlegung des Historischen Materialismus: Interpretation der neuer veröffentlichten Manuskripte von Marx, 良知力・池田優三訳『初期マルクス研究』,未来社.
- Marx,Karl,1957,Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie.Einleitung,*MEW*,Bd.1,城塚登訳『ユダヤ人問題によせて・ヘーゲル法哲学批判序説』,1974,岩波書店.
- ,1985,Ökonomische-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844,*MEW*,Bd.40,城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』,1964,岩波書店.
- ,1958,Deutsche Ideologie,*MEW*,Bd.3,古在由重訳『ドイツ・イデオロギー』,1956,岩波書店.
- Olson, Mancur, 1965, *The Logic of Collective Action*, Harvard University Press, Massachusetts., 依田博・森脇敏雅訳,『集合行為論』,1983,ミネルヴァ書房.
- Pakulski,Jan & Malcolm Waters,1996,*The Death of Class*,Sage,London.
- Roberts P.C. & M.A.Stephenson,1970,A Note on Marxian Alienation,*Oxford Economic Papers*,vol.22(3).
- Schaff,Adam,1977,*Entfremdung als Soziales Phänomen*,花崎*平訳『社会現象としての疎外』,岩波書店.
- Schmidt,Alfred,1971,*Der Begriffe der Natur in der Lehre von Marx*, 元浜清海訳,『マルクスの自然概念』,1972,法政大学出版局.
- 清水正徳,1971(1994),『人間疎外論』,紀伊国屋書店.
- Tilly,L.A. & Charles Tilly,*Class Conflict and Collective Action*,Sage,London.